

期日：令和7年1月23日（木）

時間：10：30～12：00

会場：生涯学習センター視聴覚室

1 開会

2 所長あいさつ

当センターではこれまで様々な事業を行ってきた。その中で何よりも嬉しく感じたのは、研修会や協議会などの参加者の感想として、「具体的に理解できた」、「学ぶことが多かった」、「新たな視点を得て今後の業務に活かせる」といった喜びの声を多くいただいたことである。これは当センターが参加者の希望に寄り添った運営を心がけてきた結果であり、今何が求められているのか、その求められていることの本質にどう迫っていくかということを突き詰めてきた成果だと考えている。こうした嬉しい声を力にして、今後も頼りにされる生涯学習センターであり続けたいと考えている。本日は、当センターの活動を更に充実したものにするために、様々な視点から忌憚のないご意見やご助言をお願いしたい。

3 出席者自己紹介

●A委員

第1回運営委員会の時の自分のメモに、赤で「若手に注目」と書いてあった。公の施設が住民のいろいろなニーズに応えながら、若手にも目線を送っていることは、若者にとって力になるだろうと思う。

●B委員

研修会に参加させていただいたり、施設を会議でお借りしたりして、生涯学習センターには本当にお世話になっている。研修はいつも楽しく、学んだことで次に何をしようかと考えて、わくわくしている。

●C委員

毎年大きく変化をされていることに敬意を表したい。所長の挨拶のとおり、たくさんの喜びの声に満足することなく、今後もさらによいものにするという意気込みでがんばってほしい。今、新県立体育館の整備が進んでいて、八橋地区も大きく変わっていく。このセンターにも、今まで利用することがなかった人が興味を持って入ってくるかもしれない。生涯学習センターの活性化に是非協力していきたい。

●D委員

私の自治体を含め多くの市町村が、昔からあるよいものを活かしつつ、今の時代に合った新しいものを取り入れようとしているが、取捨選択が難しかったり、取り入れ方や落とし込み方が難しかったりすることがある。そんな時に、センターに力になってもらい、前に進むことができおり、感謝している。

4 委員長・副委員長あいさつ

●副委員長

国内外でいろいろなことが起こっており、私たちの日常にもどんな形で影響がでるのか戦々恐々としている。そういった点でも、足腰の強い地域、人材の育成は非常に大切であり、センターがその機能の貴重な一端を担い、果たしていることに感謝している。

●委員長

昨年も、生涯学習センターの活動を何回か見せていただいたが、センターの事業を見ていると、そこから社会を変える力があると思っている。今後も期待している。

5 案件 「生涯学習センターの機能及び事業等のあり方について」

(1) 今年度の事業状況

①総務チーム

貸館について、令和2年度はコロナ禍により大幅に利用者数が減少したが、現在は徐々に回復しているところである。今年度は11月時点で前年同月比6,373人減(12.3%減)で、年間でも減少となる見込みである。その理由の1つ目は、エアコンの故障により第3研修室と会議室の貸出を休止したためである。2つ目は、和室の稼働率の低迷(10.5%)である。和室については、昨年度の稼働率が19.5%で、今年度もその状況が加速している。センター全体の稼働率は43.2%だが、この数字は、平均すると毎日8つのうち7つの部屋が午前か午後使用されているという値である。従って、稼働率を上げる余地はまだまだあると言えるが、稼働率の考え方にはいろいろあり、例えばホテルの場合だと、稼働可能な部屋100室のうち70室が使用されれば70%となり、メンテナンスしている部屋は分母から除いて計算する。センターの場合は開館している日にメンテナンスや修理のため使えない部屋があっても、それらを分母に含んだまま計算しているので、老朽化で使えない部屋があると稼働率がどんどん下がることになり、ホテルとは稼働率の計算の仕方に違いがある。公共施設の有効活用という観点から稼働率という考え方は有効で、今は、メンテナンスや修理に努め、稼働率を下げないようにすることに取り組んでいる。なお、利用者の事業別割合については、貸館事業は46%、主催事業で54%である。最後に、前回話題になった使用許可の電子申請だが、プログラム作成の費用がかかるため、断念せざるを得ない状況となった。今後全庁的にコンビニ決済の動きがあったときに、流れに乗り遅れないように注意を払っていきたい。

②学習事業チーム

【今年度の特徴的な取組】

センターの3機能「シンクタンク機能」「研修・人材育成機能」「学習活動・情報発信」をネットワーク化し、持続可能な地域づくりに向けて邁進している。今年度の特徴的な取組としては、最初に「ツドウベース」について話したい。障害者スポーツスペースと地下ホールを一緒にし、今年度から「ツドウベース」として活用している。まずは、セカンドスクールの利用ということで、ある小学校の事例を紹介する。小学生には何班かに分かれてもらい、地下ホールでモルックを体験してもらった。正規のモルックは木製で重さもあり、室内で行う場合、壁や物を破損する可能性があるため、センター職員が紙で作った特製モルックを使い、スペースも小さめにして体験してもらった。点数計算が難しいためアプリを使って計算するなど、プレイヤーの負担を減らすための工夫も子どもたちに見せた。中2階の障害者スポーツスペースでは場所を2つに区切って、ボッチャと卓球バレーを体験してもらった。ただ楽しむだけではなく、人にルールを合わせて楽しむということの意味を考えてもらえるようにした。また、ある研修会では、ゲーム運動遊びの講師を務め、地下ホールでモルックを体験してもらった。ただ楽しむのではなく、我々がどのような考えで障害者スポーツに取り組んでいるのかも伝えた。ボッチャはあえて講堂にコートを作って実施し、正式なコートがなくてもちょっとしたスペースがあれば楽しめるということを実践してみせた。中2階はフリー体験スペースという形で、卓球バレーや、雨樋を使ってボッチャのボールを転がす体験をしてもらった。ロコミで私たちの活動を知ったある社会福祉施設からは、「普段は施設の中だけで活動しているので、是非外に出たい」ということで相談を受けた。話合いの結果、センターを会場にボッチャの大会が開催されたが、和やかで笑顔があふれる大会となった。このように、ツドウベースの稼働率は高くなってきている。2つ目として、「熟議」についてお伝えしたい。今年度は「熟議」の力を再確認することができた。数年前に続き今年度も、様々な立場の参加者が障害の有無にかかわらず共に楽しく学ぶ場について意見を交換し合い、学びへの参加意識を高めることを目的に、「ツドウベ・イウベ・キクベ」を開催した。障害のある方も含めて多くの方が参加してくれた。とても熱心な話合いが行われ、最後には、「行動する」、「場が欲しい」などのキーワードが集まった。「障害の有無にかかわらず参加者同士が交流し、たくさん話したくさん聞けた」という声も聞かれ、満足してくれた人が多かったのではないかという印象をもった。近代美術館からは、みんなが近代美術館で楽

しむための活動を支えるキンビコミュニケーターの話合いのファシリテートを依頼された。既定路線ではなく、キンビコミュニケーターの皆さんに率直な気持ちを話し合ってもらった初回の「熟議」では、「久しぶりに『話』ができた」、「わからないことを恥じなくていいと感じた」といった感想が聞かれた。何回か話合いを積み重ねて、どんな活動をしたらよいかを皆さんに考えてもらった。話合いの合間には、アイスブレイク的に目隠しをして美術館内を歩く活動も行った。具体的なアイデアは100を越えたが、自分たちでできることを考え、自分たちで企画まで落とし込むことができた。こうした事例はあまりないのではないと思う。今年度特徴的な「熟議」の1つとして、ネットの使い方についての「熟議」がある小学校で行った。全校の保護者と5、6年生の児童で100人を超える規模だったため、最初に全員がそろっているところでレディネスを整えてから、5年生児童と保護者、6年生児童と保護者、1～4年生保護者に分かれて「熟議」を行った。学校側には、保護者と自分の子どもと一緒にしないグループづくりを事前に依頼しておいた。複数のファシリテーターにズレが生じないように、共通のスライドを使った。自分の親でない気楽さもあり、本音の意見が多く聞かれ、保護者も子どもの声に耳を傾けながら熱心に話していた。保護者パートでも意見交換の時間を十分にとった。最後に、再度全員に集まってもらい、全体に向かって話をして会を終えた。初めてのケースだったが、今後こういう形も探っていきたいと思える「熟議」になった。今年度は県外のある自治体で、昨年度に引き続き2度目の「アルクベ・イウベ」も実施し、あきたWithの代表も参加してくれた。ただ街歩きをするだけではなく、話し合う時間の大切さを改めて確認し、依頼元の自治体職員にもその良さをわかってもらえることができた。3つ目として、「友だちの友だちは…」というお話をしたい。ある特別支援学校の夏のセミナーに、防災のブース担当として参加した時のことである。新聞紙のスリッパや箱などの作り方を紹介していた我々のブースに来てくれた保護者の方から、「自分の子どもにもこういったことを体験させたいが、規模が小さくても協力を頼めるか。」という相談をされた。私は、「1人でも2人でも全然構いませんよ。」と答えた。その後、その保護者からの依頼で、「非常時に役立つクッキング〜！」(12月「ポリ袋で蒸しパンづくり」、1月「ポリ袋で炊飯」の2回)という催しが実現した。後に、その保護者から「自分1人では、考えてるだけで終わったかもしれないが、生涯学習センターの皆さんと出会えて、形にすることができた。心強かった。」という言葉をいただいたときは、「広がり」の力を実感し、我々も嬉しかった。

最後に、次年度の取組については、基本的には今年度の大きい柱を軸に進めたい。ただし、同じ事をやるということではない。これはどういう意味かをお伝えするために、11月の研究大会の際にもお伝えして反響があった話を紹介したい。あるとき私は職員に、ボッチャ・卓球バレー以外の新しい取組を考えたらどうかと投げかけた。すると職員から、モルック交流大会の開催はどうかという提案があったが、私はこれを取り上げなかった。この話を伝えた後、研究大会の参加者にその理由を考えてもらったわけだが、ほとんどの人が、「わからない。」といった顔をしていた。さて、何がダメなのか。正確に言うと、これは「ダメ」ではない。ただ、私は、交流大会といった大きな催しをする前に、もっと地に足を付けた取組をしたかった。まずは職員自らがモルックに真剣に向き合って、この競技のおもしろさを知ったり、難しさを発見して、そこから多様な人たちにルールを合わせたり、いろいろな工夫をしたりする、という過程を大切にしておしかったのである。この話を聞いた市町村の方々からは「大変励みになった。」という声を聞くことができた。来年度も形にとらわれずに自分たちで一步一步進んでいけたらと思っている。なお、モルック交流大会を取り上げなかった後どうなったかということ、地道な取組の結果、道具の様々な工夫や、アプリの導入など、今年1年いろいろな形でモルックを楽しむ方法を紹介できたと思っている。もし今、職員から「モルック交流大会を開催したい。」と言われたら、ゴーサインを出せるところまで来ていると思う。以上で、今年度と来年度の話とさせていただきたい。

【障害者の生涯学習に関する調査研究】

調査研究事業では障害者の生涯学習を推進するため、特別支援学校、民間企業等との連携・協働による実践、各地域における学習機会の企画と実施、新たな学びの場・学びのジャンルの開拓を行ってきた。特別支援学校、民間企業等の連携・協働による実践としては、特別支援学校での防災講座や、第5回あ

きたWith杯ボッチャ交流大会等を行った。各地域における学習機会の企画・実施としては、複数の自治体、特別支援学校保護者からの依頼で行った防災講座や、秋田県立近代美術館キンビコミュニケータ講座などがある。新たな学びの場としては、今年度、地下ホールと障害者スポーツスペースを合わせて、障害者の生涯学習のための活動スペース「ツドウベース」としている。利用者は12月までで延べ1,600人を超えており、特別支援学校の卒業生が友達や知り合いなどに自ら声を掛け、ものづくりやスポーツを楽しんだりしているほか、そういった活動を見て、新たに自分でも学びの場づくりに挑戦したいという人も出てきて、学びの場は確実に広がってきている。新たな学びのジャンルとしては、モルックの研究を行ってきた。例えば、室内で出来るように、紙製のモルックを作ったり、投げるのが難しい方のための工夫を考えたり、最後まで楽しめるようにルールを変えたりした。こうしたことによって、障害の有無にかかわらず楽しく学ぶことにつながってきていると思う。10月に行った熟議「ツドウベ・イウベ・キクベ」では、楽しい学び場をつくるために大切なのは、どんなに小さなことでもまずは行動してみることであり、そこからつながりがうまれ笑顔で学べる場ができるというまとめがされた。これからも、障害の有無にかかわらず楽しい学びの場をつくるために、1歩ずつ確実に進んでいきたい。

【市町村・公民館等職員専門研修、生涯学習・社会教育研究大会】

市町村・公民館職員等専門研修は生涯学習・社会教育関係者、公民館職員などに求められる資質や力量を高めることを目的としている研修で、全3回行った。2回目の研修は大雨の予報のため参加される方々の安全に配慮して延期することになり、12月に開催した。生涯学習・社会教育研究大会では、「人づくり・つながりづくり・地域づくりの好循環を目指して～ゆるやかなネットワークによる社会教育の充実～」をテーマに、午前は、他県で教育委員をされ、子育て支援活動を行うNPO法人の代表理事も務めておられる方から、午後は障害当事者で車椅子ユーザーの方から話をしていただいた。いずれの研修会もアンケートでは満足度の高い回答を得た。

【家庭教育支援指導者等研修】

今年度は年間研修テーマ「学校・地域の『つながりの力』で保護者と子どもをサポートしよう」のもとで、4回の研修を行い、延べ148名が参加した。本研修では、学校と地域との連携、家庭での困り感に対応した家庭教育支援、保護者と子どもを応援するために支援チームができること、などについて専門家からお話をいただき、演習も行った。参加者からは、参加者同士で意見交換をすることにより、他の市町村の支援チームの取組を知る機会となるとともに、自分が考えてきた取組の方向性が定まった、などの感想が聞かれた。今後、各支援チームがさらに様々な主体とつながることで広がっていく、新たな家庭教育支援の可能性に期待し、我々生涯学習センターも協働で取り組んでいきたい。

【「学校・家庭・地域連携総合推進事業」にかかるオーダーメイド型社会教育主事派遣】

今年度は、3年目となる1市と、初年度となる1市及び1県立高校がエントリーした。3年目を迎えた1市では、昨年までの取組を市内の各地区に広げ、4つの地区で「熟議」を開催した。初年度の1市では、市内の小学校において、保護者、地域、学校の声を受けて、ネットやゲームとの付き合い方を考える、親子が一緒になっての「熟議」を行った。また同じく依頼初年度の県立高校は、県立学校として6校目となるコミュニティ・スクールの導入をめざして、周辺のコンセンサスを得て目標の共有を図るための「熟議」をこれまで2回実施しており、2月18日には3回目の「熟議」を予定している。また、現在、各依頼元に対して今年度の取組のまとめに向けたアンケートをお願いしているところで、その内容を受けて2月中に依頼元に出向き、来年度の取組の方向性を考えていく予定である。

【「障害者の生涯学習支援モデル事業」にかかるオーダーメイド型社会教育主事派遣】

今年度は3市、2町の5市町からエントリーをいただき、打ち合わせで方向性を定めながら、協働して進めてきた。1市ではスポーツ体験教室と防災体験教室を、別の市ではニュースポーツ体験講座などを実施した。また、もう1つの市においては、市の生涯学習課職員とともに、特別支援学校青年学級が公民館で活動している様子の視察も行った。それぞれの市町の状況は異なるため、事情に合わせて進めてきた。今後はそれぞれの市町と今年度の振り返りをし、来年度へ向けて方向性を確かめる予定である。

【あきたスマートカレッジ】

この事業は、県民への学習機会の提供とセンターの情報発信をねらいとしている。今年度の申込数は昨年度に比べて、無料講座が262名の増加、有料講座が33名の増加、合計で295名の増加になった。防災講座には定員に対して165%の申込があり、各講師にお願いして定員を増やすという調整を行った。防災への関心の高さが現れたものと感じている。講座の申込方法としては、今年度は全体の25%が電子申請システムを利用している。今後も、より手軽で簡単な操作で申込ができるよう整備していきたい。

【展示スペース活用】

県民の生涯学習振興に資することを目的とし、展示スペースの利用を通して学びの成果を紹介したい団体・個人の方を募集している。利用できるのは1階エントランスホールと地下ホールで、「グループや個人で作製した作品を紹介したい方」「日ごろの活動や研究の成果をPRしたい方」「生涯学習に役立つ情報を広く発信したい方」などを対象としている。今年度は、1個人・6団体（サークル、特別支援学校、市内サービスセンター等）による展示が開催され、期間中は12,000人近くの来館者があった。いずれの展示も多くの方々にご観覧いただき、出展者の皆様にも喜んでいただいた。来年度の展示には、3個人6団体の申し込みをいただいております、初出展は2個人・1団体となっている。今年度より2回増えて、年9回の展示開催となる予定である。

（2）来年度の主な事業計画

（1）②のとおり。

（3）その他（各委員から）

●A委員

若者への視点という点について話したい。大学生を中心に若者が困窮しており、お金がなく活動に参加できないといった機会の喪失を感じている。先ほどの説明の中で、防災クッキングイベントに大学生が参加している話があった。大学生とのつながりや、参加のサポートの有無について伺いたい。

●センター職員

防災クッキングイベントの大学生1名については、大学の授業の一環としての参加だった。今まではスマートカレッジを受講してもらっていたが、今年度はポッチャ交流大会やこうした防災クッキングなども選択肢に入れてもらい、うまくマッチングした。これはうまくいった例だが、そうでないケースもたくさんある。空振りを恐れず声をかけるようにしている。以前秋田大学の授業へ出向いて説明したこともあったが、効果はあまりなかった。やはり、口コミの力が大きいと感じている。交通費等の支援は特にしていないが、楽しいと思ってもらえれば友達にも広まっていくので、顔の見える関係のなかで声をかけていくことが確実な方法だと思っている。

●B委員

私は貸館も年に何度か利用しているが、午前と午後で借りると、お昼の時間帯もその部屋を使えるので、昼食をとることもできて、ありがたい。講座等については、参加者として得るものがたくさんあり、話を聞くだけでなく自分の考えを整理する時間もあるので、こういった講座は生涯学習センターの中だけでなく他のところにも広まってほしい。ところで、受講者の年代は把握されているものだろうか。それぞれの年代に合わせた企画があればよいし、若者に届くようにSNSなどでの広報を考えてもらいたい。

●センター職員

令和3年度のスマートカレッジのデータだが、全体では70代以上が54%、60代が26%、30～50代が15%、18～20代が4%である。ただし、講座の内容によって数字は変わる。例えば当時あった「新たな学び講座」では、70代以上が23%と少なく、18歳未満が15%、18～20代が8%、30～50代が39%である。

●C委員

若者や学生の巻き込みという点について話したい。異なる切り口で攻めてみたらいいのかなと思って

いる。例えばインターンシップだが、この期間に何をやるかということではなく、企業に足を運び、企業の人間と交わるという切り口から興味を持って来てくれているので、そこからつながりをつくるというやり方もある。また、大学と連携し、ゼミの中で「お客様のサポートをよりよくするためにどうすればよいか」といったテーマを設けて、学生にアイデアを考えてもらい、そこで接点ができれば別の機会にもつながっていくと思う。小学校でネットの使い方についての「熟議」をしたということだが、私の会社でも、全社員のITリテラシーを上げようとして、勉強してもらったり資格を取ってもらったりしている。パソコンやスマートフォンを一台持っているだけで、知識は人に教えられるものではなく自ら学ばなければならない時代になってきているし、採用試験で大学生と面談すると、すでにそういう資格をもっている学生もいるのが現状である。そういう機会をつくって自分で学んでいけるところまでつなげていけた素晴らしい取組だなと思った。最近、他の企業の方とご一緒する機会があると、秋田県の人口減少の影響で働き手が少ないという話になる。海外からも働き手を呼ばなければならない状況の中で話題に上がるのが障害者や引きこもりの方のことである。今日は、そういう人たちが社会に出たり、学んだりする機会やアプローチの仕方について学ぶことができたと感じている。

●D委員

私の自治体でもオーダーメイド型社会教育主事派遣を2つ利用させてもらっており、当自治体の事情に合わせてゆっくりやらせていただき本当に感謝している。今日の話の中で、ただ楽しむだけでなく、なぜそれをやるかを伝えるようにしているという話が印象に残った。また、キンビコムーニケーターのグラフの2軸化も印象に残った。多様化の時代で何を優先させるかを見極めるのが難しい中で、自分も事業を行う上であの2軸を今後考えていきたい。

●副委員長

この1年間の事業、お疲れ様でした。センターの皆さんからは、楽しんで学んでもらうためにはまず教える側が楽しくなければ何事も始まらないという学びの原点のような意気込みが伝わってきた。家庭教育支援から行政関係職員対象の研修、障害者支援、また、見えない部分で弱者と呼ばれる方たちにもしっかりと焦点を当てて取り組まれていることに感謝したい。センターの活動がエネルギーだったと感じる1年だった。暮らしにおける課題の一つである防災については、皆にとって切実な分野なので、今後も実例等を紹介しながら研修内容の充実、研修機会の拡大を図り、継続していただきたい。いざという時に動ける人材育成につなげたい。このセンターは、常にタイムリーな情報提供をしてくれる機関であり、生きていくための学びの場、人とのつながりの場であり、活動の指標となる拠点である。今後とも共に歩みを進めたい。

●委員長

説明を聞き、楽しそうな事業を多く実施してきたと感じた。社会教育法3条に「環境醸成」とあるが、これは環境の整備だけではなく雰囲気をつくっていくと読み取ることもでき、センターの動きはそこまですべていっているのではないかと思い、素敵な熱意ある取組だと実感したところである。大変勉強になった。

6 所長あいさつ

本日いただいたご意見をもとに、さらなる改善を図ってまいりたい。楽しく実りのある学びの場の実現に向けて、秋田県が抱える人づくり、地域づくりについても当センターの果たす役割は大きいと感じている。皆さまに頼りにされるセンターを目指してまいりたい。

7 閉会